



# ぼくをわすれて



Canan

わたしが幸せになる話を綴ろうと思う。

たぶんわたしの他にだれも幸せにならない話だ。

そして、わたし自身が幸せになるかどうかもちっとあやしい話だ。

こうして書き連ねる間にも、誤変換がたくさんあってうっとうしいけれど、

とりあえず続けてみようと思う。

続けることが一番、なんて誰かが言っていたじゃないか。

わたしはちっともその言葉を信じる気が起きないけれど。

今も昔も、わたしはなんとなく流されて生きている。

ときどき、都合のよい時にその言葉を信じてみたり、気分が乗らなくなったら信じなかったり。

波に抗うなんて、無駄なことだと信じていた。

いまも。

ずっとむかし、わたしはわたしの生きる世界で輝いていた。

日々が幸せだった。

いまの、ほどほどに幸せな、でもとても大事な日常で、時たま思い出すあの頃。

すこしだけ、思い出に浸ろう。

小学生だったころのことは覚えていない。

ぶつぎりにされた記憶の断片がふと浮上することはあるけれど、  
あのときわたしが何を感じて生きていたのかはいまはもうわからない。ざんねん。

中学生のころ。この時が一番輝いていて、同時に地獄みたいでもあった。  
思い出したくないことと、いまも大事に秘めている出来事。  
幸福と絶望は同時に存在しえるのだと、いま思えばとても不思議だ。

高校生になった。進学のために学業に励もうと心に決めた。一年目。  
二年目の中だるみ。最後の年は、目的と手段を入  
れ替えてしまったのかも。最後まで頑張りきることができなかった。  
同性だけの空間にずっといたせいかな、ドラマや小説にありがちな青春とは無縁だった。

中高と部活動をしていなかったからか、わたしは何かにかける情熱とか、  
上下関係に疎い。あまりこだわりのない。

情熱なんて、なくても生きていけると今は思っている。とてもつまらないとも思うけれど。  
少し心配なのは、先輩後輩という、大体の人間が経験している上下関係に  
不慣れなことだ。きっとだれかれかまわらず何でもかんでも口にしてしまうし、  
それは上司に対してだろうが部下に対してだろうが同じ。  
わたしは後進を育成するのには向いていないだろう。  
出る傍から芽を摘み取ってしまうのが関の山。出芽した青い芽は、見て見ぬふりで奔放に育てよう。

わたしのなかで、止まっている時間がある。  
今はもう、傷つくことも戸惑うこともないけれど、私がずっととらわれている時がある。  
愚かで純粹で、二度と戻れないあの日の記憶に出会う。  
中学生になったばかりの、春。  
わたしはそれから、恋をしていない。

はじめてではないのに、はじめて出会った友人と同じ相手に恋をした。  
いまでは恋に恋していた、ただの憧憬ではないかと俯瞰できる。  
くだらない、恋。忍んでいた、恋。

そのうち友人は別の人を好きになって、惚れっぽい性格か次から次へと対象を変えていった。  
わたしは何も言わなかったけれど、正直ほっとしていた。  
だって、同じ人を好きになるなんて。どうしたらいいかわからなかったから。  
友人は、ひとりの人に恋をする。  
長い恋だった。  
深い恋だった。  
少しでも姿を見ようと、背伸びして、ゆっくり歩いた。

冬になった。  
わたしたちは、まだ13だった。  
わたしたちが恋した相手は、来年16になろうとしていた。  
散った。  
桜の咲かない校庭で、その年最後になるかもしれない雪に包まれながら  
わたしたちは、ただ静かに在校生として見送る。

二度目の春。三度目の春。  
わたしたちは新しい恋を探そうとしなかった。  
友人は何度も、何度も、昔を思い出してわたしに助けを求めた。  
そのたび、わたしも苦しくなる。  
話をするたび、告げる言葉。  
昔のことに縛られたって、仕方ない。  
もう、過去に縛られるのはよそう。

違う。  
過去に縛られているのは、わたしだった。

あの人以上のひとは現れない。

そう、言い聞かせている。

気づけばもう何年も月日経って、わたしには手枷も足枷もない。

それでもなお鳥かごの中に住まい続けるわたしは、愚かですか。

叶わない切なさが可愛くて仕方がなくて、わたしは過去に自らとらわれ続けている。

純情と思い出を美化して大事に抱いて、壊したくないから前へと進まない。

壊れるくらいなら、ほかのものをかなぐり捨ててもいいと思っているのか。

愛おしげに、二度と形にならない瞬間を眺める。

時は止まり続けている。

わたしのなかでひとつだけ、時間が止まっている。

自己愛というおくるみのなかで。

戻れない過去を懐古する時間は、もう残っていない。

だからわたしは、あなたを忘れます。

心から笑って昔話ができる日まで、無理しないでいようと思っていた。  
それが一番いいって思っていた。

だけど、わたしにとってそれはただの逃げだ。  
自分に無理するなど言って、永遠に痛みを可愛がる。  
必要なのは荒療治だった。  
忘れていた。わたしは怠惰で、流動的で、自分に一番甘い人間だった。

いまのあなたを知っても、わたしには何もしようがない。するつもりもない。  
それなのに続けているなんて、やっぱり痛くてしょうがないことが大好きだから。  
もう、やめよう。

あなたを知る手段を、捨てた。  
どうしてかすがすがしい。  
それから、伸びをする。  
明日になったら、疎遠になった友人に連絡してみよう。  
近々食事でもしないかと誘ってみる。  
もう二度と、私は彼の話をしないと決めた。  
いま。  
きっと彼も、それを望んでいるだろう。

ぼくをわすれて、と。